

# 洛友会報

京都市左京区吉田  
京都大学工学部  
電気科教室内  
洛友会



京 都 駅 第 三 世

大学に這入るのは心ときめく事である。そして上洛する時、先づ心を打たるは京都駅。卒業して京洛の巷に別離の言葉を残すは京都駅。何んと言つても京都の印象の初めと終りの押さへとなる京都駅である。我々洛友会員は三つの姿の駅で区分される。第一は棟瓦建。第二は木造仮駅舎。これが焼失して第三のコンクリート建。第三の現在の駅舎から築立つて行方を決定した卒業生は少ない。写真

## 年頭挨拶

会長 鳥養利三郎

新年はちやんと定期的に廻つて来るもので、別に改めて感懐を述べる程のものでもないかも知れませんが、洛友会に取つては本年は特に幸多き年であらうと張切つております。洛友会を結成してから今年が三年目になり、これまでは体制を整へ準備に没頭する時代でありましたがこれから颯々本格的な活動を始める。これを踏み出す訳であります。

### 洛友会中国支部会則

第一条 本支部は洛友会中国支部と称する。

第二条 本支部の事務所は広島市小町中国電力株式会社内に置く。

第三条 本支部は会員の親睦を図り当地方の学術文化の発展に寄与する事を目的とする。

第四条 本支部は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

一、本部との連絡及び協力

二、支部名簿の整備作成

三、年一回総会を開く

四、その他本支部の目的を達成するに必要な事業

第五条 本支部は左の会員で組織する。

正会員 中国地区在住の京都大学工学部電気工学科卒業生及び本支部の役員会に於て承認を経た者

賛助会員 本支部の事業を援助する法人又は個人

顧問 若干名

幹事 若干名

役員は総会の議を経て定める

第八条 支部長は支部業務を統轄し幹事は支部長の命を受け事務を処理する。

第九条 役員は任期は一年とする但し重任を妨げない。

第十条 本支部は支部会費及び寄附金を以てて経理する。

第十一条 会員の会費は年額二百円とし本部会費年額三百円と共に会計年度の初めに納入するものとする。

第十二条 本支部の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第十三条 本支部の決算は毎年総会に於いて報告する。

第十四条 本支部会則の改正は総会の決議を経る事を要する。

本会則は昭和二十八年十二月一日より実施する。

役員名簿

顧問 鈴川 貫一

幹事 高橋 親雄

同 添田 貫一

同 潮見 公安

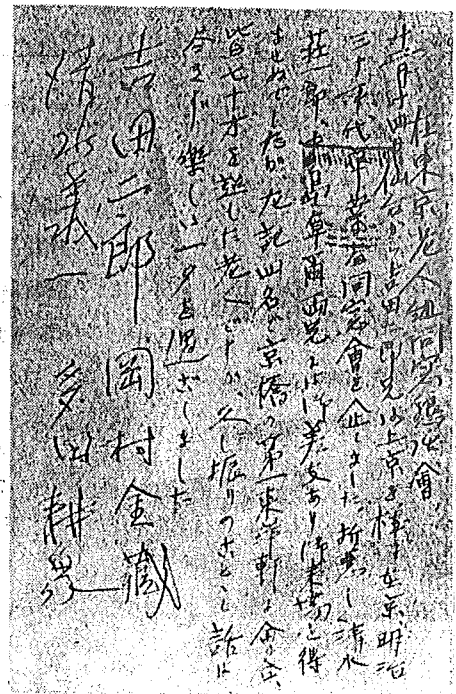
同 古賀 七郎

同 松谷 健一郎

### 研究と事業

(一)

昭和十一年一月一日陸軍科学研究所長多田中将の紹介状を持参し、羽織袴に威儀を正して鳥養先生を訪ねた人があつた。応接間に招じて初対面や新年の挨拶があつた。この度突然お伺いしたので話をされましたが、要するにこの人は高周波製錬に対しては神懸りの信念をもつておられるが東京では当時の理化学研究所所長の大河内博士初め誰もが対手にされない



ので多田中将の紹介状をもつて熊々先生を訪ねられたようである。話は雑々として書きす、冬の日さしは既に窓にかかり、餌さを求める雀の声は軒端に喧しい頃ともなつたので、先生は終に「ソリヤ高周波であろうが低周波であろうが鉄鉱石に電気をぶち込めば鉄は出来すよ！然しそれが儲かるかどうかはわかりませんよ！」と話されると、間一髪を入れずその人は一段と声を張り上げて「黙れ！一文も出さずに儲かる儲からぬなど云へますか！学者はそれがイエスカノーを答へたらよろしい！それを事業にするのは自分の腕にあることですぞ！」と、あつ氣にとられて先生には頓着なくまた一段と丁寧な口調で「イヤありがたうございました、これで事業を起す信念を固めました」といとも元氣よく一揖して辭去されました。この人は日本高周波工業株式会社専務として敏腕を揮ひ、朝鮮咸鏡道においての大新鋼工場を建設された高橋三省氏(故人)その人でありました。

(三) 世の中にはそれが良いとわかつていても特に發明考案では屢々ありますが、それを事業として普及するには時勢も必要ですが中々の根氣と努力を必要とします。この苦難を今度は鳥養先生自身が嘗められたことを話しましょう。

昭和十四年に鳥養先生が青柳研究所を引継がれ、応用科学研究所と改称し、陣頭に立つて研究設備を拡張し研究要員を充実し、世界に類のない高周波發生装置とその焼入法を創案完成されました。

既に御承知の方も多数とは存じますが一応の説明をいたしますと、従来の高周波發生装置(瞬間火花放電の間隙を用いた發振器)は電圧高く電流が少いから焼入に際してロスが大であつて効率が低かつたのを、これにタンク回路を附設して電圧低く電流を大にし焼入効率を倍以上にし大容量的装置を作るに至つたので世界にその類例を見ないものである。この装置を利用すると各種機械器具の鋼部品の必要とする部分が数秒の如き短時間で焼入することが出来るばかりでなく、その表面に深層自在に所要の硬さを得られる便利な

ものである。この焼入方法は従来の滲炭法または窒化法による焼入方法に比べて床面積の小さなことは勿論資材の節約および工賃の減減著しい利益がある。また米国における電勵發電機法や真空發振器法によるものに比し設備費極めて低きのみならず幾多の利点をもつものである。

最初は小型の齒車類、内燃機の気筒内面、車軸、ピン類の焼入に応用していたが、今では従来焼入が必要であつた然かもその作業が困難で誰もが手をつけなかつた圧延用ロールやその外周等電機に及ぶ大型部品も本方法により焼入可能とし、その寿命を数倍にした。またこの焼入を行つた製品は他の焼入による製品に比べて、短時間加熱のため歪曲や荒仕上げまたは仕上げたものに焼入することが出るばかりでなく、疲労強度大で大きな荷重に堪へ得るから、兩者相待ちで材料の節約となる。

かようにしてこの創案された所謂鳥養式高周波焼入装置は、現在三〇〇キロまたは二〇〇キロのセットとして国有鐵道初め重要な五十数社の工場に採用され、既に一、二年間にその設備費を銷却しているが、これまでに成るには十数年の歳月と關係者の並々な努力を必要とした。

戦時中ですが、これを航空機部品に應用すれば優秀なものが出るので、これが効用を説き指導するため先生は幾度も曝露に晒された。或るときは冶金の西村先生と空襲で汽車が運転を停止したため止むなく小田原駅に仮寝の場所を求められたが已に椅子は全部占領されているのでコンクリートの上に外套を被り転がられたが、遂に寒さに堪へかね初發を待ち兼ねて次の工場へ指導に向はれたのである。

かようにして先生は、これで一文だも儲ける氣は手頭なくとも、事業

とするには成る程六つかしいものであるとの体験を必も必み嘗められたようである。(老書生)

クラス会だより

昭和十六・一二クラス会 (昭和十六年十二月卒業)

昭和二十八年年度のクラス会を十二月六日山本幹次君の世話で電々公社鹿ヶ谷荘で開いた。集るもの尾藤、加藤、西村正、豊田、山本幹、西村重、竹屋の七名。出席者の少数をかちつ、一晩を清談(?)に過ごした。次回は七月中、下旬頃三重鳥島羽で尾藤君の世話で開くことに決定したから多数の参加を望みます。(竹屋)

昭和一八年卒クラス会

本年度は卒業一〇周年記念クラス会を十一月二日関西電力株式会社社寮において開催致しました。

岡本、加藤、松田、阿部、林(重)、林(千)、京田の諸先生の御臨席を頂き、懐しい京洛の秋の一夜を、あの思い出、この思い出に楽しく語り合いました。東京から或いは北陸、志摩の遠方からの出席者があり、卒業

以來始めて再会した人々もあり、諸先生の教室ではして戴けなかつた名講義あり、これは試験がなくてもフリーパスは確實。興は遂に兩教授の即興詩を引出しました。

阿部 教授  
おやまあおどろいた頭は白し十年  
林重憲教授  
出席者 伊原、池上、岩谷、植田氏原、近藤文、高嶋、田辺(角田)、並木、広田、森本、山本吉住

△本部だより▽

○会則第五條第一項の規定により役員会は関野彌三氏を正会員として承認した。現住所京都市上京区出雲路立本町

なお同氏は明けて七十六才の春を迎へられ頗る健在であります。

○前号「御願ひ」について居所不明者の御通報をお寄せ下さいました会員の方々に厚く御禮を申し上げます。皆様の御協力によつて多簿を完成したいと存じます。

○各支部の總會その他会合を計画されましたときは本部へ御通知下さい。会長始め諸先生に都合をつつて頂いて出向くようにいたします。



### 中部支部總會の記

中部支部總會は鳥養會長の御來名の機会を待つてのびのびとなつて、たが、漸く昭和二十八年十二月五日(土)本部から鳥養會長、山村幹事、教室から阿部清先生を迎えて、名古屋ホテル香林閣で正午から盛大に開會した。参會會員三十七名。

#### 總會(司會 本多副支部長)

- 一、清水支部長挨拶
- 二、鳥養會長挨拶
- 三、会則改正
- 六、会則第五條による會員推薦の件

第六條役員の項の副支部長の次に「評議員若干名」を挿入する

- 五、評議員の推薦 高阪金三郎
- 村田 義人
- 太田 章平
- 河津吉兵衛
- 岡田 市治
- 中山 修二
- 智識 兼則
- 田中 卓次
- 古田 久一
- 河野 勝也
- 伊藤 定昌
- 小林 佐久次郎
- 武田 哲夫
- 六、本部の概況
- 七、教室の概況
- 八、閉會の辭

伊達 達  
酒井 長武  
大杉 幹  
山本 洋雄  
菅沼 春幸  
加納 堯良  
前原 恒之  
山村 幹事  
阿部 先生  
清水支部長  
總會後宴にうつり、自己紹介後、洛友福引をおこない、鳥養先生の学



長時代(赤の坎) 赤貝の雜語  
阿部先生の表彰(淺野賢一討入ッパ)  
松田先生の後頭(蠅がおちる一灰皿)  
林先生の講義(匙をなげた一サツ)  
などなど笑い興ひ、あいあいたる雰囲気の中に、兩先生を囲んで、かしまつて報告したり、旧友肩を抱いて昔を語るなど感懐裡に午後四時万歳を高唱して会を閉じた。なお、参會者には鳥養先生御揮毫の紙色をお渡しした。(清水記)

た方が他地区の會員に懐しみがあつてよろしい。  
今一つの御願いは、各支部に編集連絡係を作つて下さることである。そりすると、本部の編輯部は、この連絡係と常に協議して、より一層立派な会報を作り上げたいと願ひしている。  
早速、連絡係の氏名(幾人でもよろしく)を御知らせ下さい御待たして居る。

△教室だより▽  
本年度卒業生の就職状況は次の通りである。(昭和二八・二九・三〇・三一年)  
採用申込会社数 一六五社  
入社応募会社数 八一社  
入社決定会社数 四〇社  
新制 旧制 計  
卒業予定者 七〇 五 七五  
就職決定者 四七 五 五二  
大学院入学 二〇 〇 二〇  
希者望 三 〇 〇 三  
就職未定者 三 〇 〇 三  
本年は採用申込会社数非常に多くその半数には誰も応募せず、残りの半数近くの会社に応募して、そのまゝ入社決定の会社に入社を決定した。一会社で数人を同時に採用する会社もあるから需要には甚しく足りない状況である。これは今年より全国の新制大学も同様新制度による卒業生を出すのが、会社の方では同じ採用するならば旧帝大の優秀卒業生を採用しようとする心理作用が大きく影響しているのかも知れない。  
併しながら学生は会社に関する知識が甚だ乏しく、教室では機会ある毎に入社案内等によつてその説明に努めているが、洛友会諸先輩の御指導と御後援に期待する所が甚だ多く、今後とも就職の御世話に御盡力下さいませよう偏に御願ひ申し上げます。(教室主任 加藤)

△本部より  
各支部で色々と  
会合、催し物等を行われし時は、記事を必ず御送り下さい。写真は出来るだけ送つて頂いて居る。  
△本部より  
各支部で色々と  
会合、催し物等を行われし時は、記事を必ず御送り下さい。写真は出来るだけ送つて頂いて居る。

を受、か、学生で鉄砲打ちとは身不相应と見られたものだ。丁度、今日なら学生が自動車をおナーロードライヴで、登校する程に目に立つたものである。  
野田の奴！学生の癖に鉄砲打つとは……と、大方、小倉先生の腹に触つたのだから、きつすいの江戸ッ兒だつたから、肩根にピリツと立じわが出来たに相違ない。  
胸裏い勢で先生は講義を我々に詰めた。必死で、とうとうその年は、鉄砲の筒を無でるところすら出来ず、脾肉の腹に堪へなかつた。  
そして先生は、サツサと外国に留学されて仕舞つた。ぱたぱたと飛び立つ雉を見送つたような、あつけないさであつた。  
私はそれから、鉄砲かついで東山に分け入つたので、こまんにした路まで、すつかり手に取るように知つていた。そればかりでなく、どのあたりには、どんな鳥がいるということも知つていた。  
今日は時代が替つたので、東山もアベック組に踏み荒されて、鳥の方角、あほらしがついてるだろう。(近畿大学々長)

運動会の復活  
大・二二 今田 英作  
私が入学したとき、教室の学生を五十名に増加された最初の年であつた。人数が多かつたので、随つて運動好きの人も多かつた。  
当時大学には、運動会は中止されたまゝでなかつた。  
そんなことで、私達は、せめて教室だけの運動会をやろうと言ひ議が実現することになつた。  
運動会場を下鴨にして公開したものだ。大勢の見物が来て感心なもので評判になつた。二年続いている内に、それが学校内でも問題になり、

運動会を食つた話  
大・七 工藤 壽男  
私の在学当時は学友会というのがあつた。これは終戦後解体されて、同学会となつたことは御存じのことと思ふ。学友会に代議員会があつて、その費用が計上されている。  
その当時、馬術部は経営困難であつた。馬術部の資金を作るため「養子」に行き決意を部員が持つていた時代だけに、ピンと頭に来るものがあつた。また、他の部で……野球だつたか、ボート部だつたか……運営困難の運動部が三、四あつた。そこで我々はピン棒部出身の代議員が、運動会を食はうじやないかと協議した。そしてどの運動部にも糖分付けすると言ふこととした。  
(總長(今は学長)が議長席について、運動会開催を議題に乗せられた。さあ手ぐすね引いていたので「今まで運動会は、なくてはならないから……」とか何とか、尻理屈を並べて、とうとうオヂヤンにして仕舞つた。  
何でも馬術部が一番多額な割当を取つたといふので非難されたと聞いたが、部員一同は馬耳東風。

私が高専学校時代から狩獵の免許を持つていたので、山野をかけ巡つて天狗に成つていた。  
大学に入つても、相変らず免状

ストーブに嫌われた話

朝、学校が始まる前に、既の掃除と脩をやらねばならない。初めの内は、寝糞を外に出すにも、がんじきのようなもので引つ張り出した。尿と糞で誠に臭い。掃いて取除に取る糞も馴染なかつた。

然し、時間に制限があるので、そんな呑気なことをしておられない。その内に寝糞も手で抱いて外に出すようになり、馬糞も手づかみするようになった。

かくて教室に這入る。靴の裏にはさまつた馬糞が廊下にコロリと落ちる。ストーブにあたる、服についた馬糞が燃せられて異臭を放つ。とうとう私はストーブに寄つてならぬと御法度を受けた。然しあの異臭は私には未だに香水より懐しい。

(尼崎市公安委員長)

○親子どんぶり○

電気教室が創設されてから、親子共に洛友会々員は誰々だろうか？何だか話の泉めいているが、誰でも一寸頭に浮かべる問題だろう。

洛友会々名簿から拾つて見ると左の二組。

- 親。上林一雄 大正 六
- 子。上林 明 昭和 三
- 親。山村忠行 大正 六
- 子。山村龍男 大正 一五

上林さんは理学部を卒業し、一旦世の中に出て、再び電気教室を卒業された方。昨年夏に金婚式を挙げられたと言ふ。この事柄も誠に羨しい。

山村さんは銀婚式と金婚式の間、何らかの文句にありそふな親子の間柄だ。これも羨しい。

阿部教授とオカキ

大・七 乙葉 眞一

昨秋、京都でクラス会があつたので出席した。洛北の修学院離宮の拜観が午前十一時からのので、少し早く足を伸ばして三千院の紅葉を賞することにした。これは家族連れだったので賑やかなこと。

三千院へは、車を乗り捨て、歩かねばならなかつた。

そしてふと学生時代を思い出したのだつた。実習を終へて再び教室に帰つてから間もないとき、阿部教授故人となつた笠井完君と三人で、この三千院に紅葉見に来た。

腹が減つたので、オカキを買つてぼり／＼笠井君と食つたものだ。

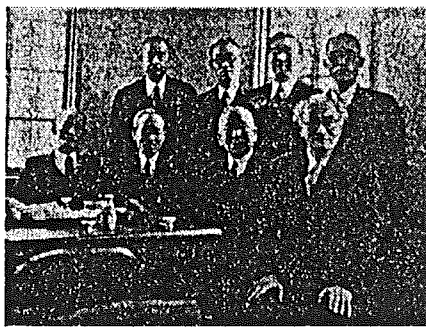
すると当時、胃腸の悪い阿部君はオカキ腹なので、私共に、そんなに食つてもよいかと、それ計り心配して呉れたのが未だに目に見えるようだ。現在、阿部教授の元氣なのは驚く外ない。

阿部の奥様は、ただ、そんなこともあつたのかと若い頃をふり返つて見られた様子だつた。

紅葉は、まだ少し早い様子に限り榮えていた。(東京副支部長)

お願い

- 前号「お願い」に御回答下さいました方々に厚く御禮申し上げます。御蔭様で五十五名が判明しました。なお左記の会員の消息を御存じの方は本部へ御通知下さい。
- 明四〇 奥富 綏彦 広瀬 良知
  - 四一 井上 多助 今井 常平
  - 四二 加藤 博
  - 四三 神崎信次郎
  - 四四 中田 末
  - 四五 河合 義連 傾崎 不二
  - 和田 善平



大 二 麻生 昇  
三 川崎 圭二  
四 西田 卓二  
五 前島 安  
六 高山 勝重  
七 井沢 孝哉  
八 松本 修二  
九 上尾益次郎  
一〇 尾崎坊義信  
一一 尾崎坊義信  
一二 尾崎坊義信  
一三 尾崎坊義信  
一四 尾崎坊義信

応用科学研究所の年賀式にて、  
下段左より西村博士、鳥養先生、  
阿部先生、林(重)先生、上段左より  
山村(大6)、一人おいて吉田(昭6)  
山本(昭6)

- 昭 一五 津賀山朝寅 村瀬 定彦  
二 劉 均衡  
三 鄭 錦榮  
四 河内 深  
五 酒井 直寿  
六 木戸佐一郎 高橋 八郎  
七 田村 重一 弘中 龍男  
八 黒田 正義 瀬川 徹  
九 吉田 謙二  
一〇 松森 茂雄  
一一 井上 芳三 佐藤 和夫  
一二 井上 芳三 佐藤 和夫  
一三 高城 正 土井 信義

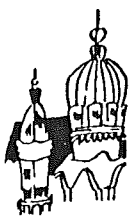
- 九 林 正夫 喜多 治夫  
一〇 大塚 一馬 沢田忠治郎  
一一 松田 富綱 和久 利保  
一二 荻野 和夫 山田 芳市(明四三)  
一三 山本 謙造 前田 利雄(大五)  
一四 山田 昇 木村千太郎(大一一)  
一五 井上 悦夫 辻 俊平(大二三)  
一六 水上 清 小川 力(昭二)  
一七 西田 隆平 今谷 重雄(昭一〇)  
一八 浅川 隆平 土田 幾久(昭二二) 二九・一三  
一九 藤村 幸雄 黒柳 昌之(昭一四) 二八・一二  
二〇 小見山一郎 日比野 省(昭一四)  
二一 李 聖濬 中近 茂  
二二 内山 勝美 馬 雲龍  
二三 堀田 正美 謝 有徳  
二四 日野 義治 謝 有徳  
二五 金 斗願 謝 有徳  
二六 日野 義治 謝 有徳  
二七 日野 義治 謝 有徳  
二八 日野 義治 謝 有徳  
二九 日野 義治 謝 有徳  
三〇 日野 義治 謝 有徳

洛友会總會について

ついでこの間總會がすんだ計りに、こんな話を持ち出すのは面白くもないが、この前の總會で、あちこちに話声があつたから書いて見る気になつた。

本部總會を京都ばかりで開かねばならぬことはなからう。却々地方から出席することは困難である。そこで、各支部の中で希望の支部所在地で開けば、支部の会員は出席して、他の地区の会員と接することが出来る。

(S)



左記は物故されました。謹みて哀悼の意を表します。(敬称略)  
岸原 重治(明三六)  
竹内安之助(明三八)

### 總會ごぼれ話

#### (1) 遅刻の名人鑑

午前九時開会と言ふので、大分弱つたと見えて、開会の始めから終りまで、だらだらと会員が入場する。講演者が新聞人だったので、講演の頭に、夜ふかし朝寝坊の新聞人に九時とは、ごう間に等しいと言つた程だった。

鳥養会長は、昔取つた杵づかでも、会場での遅刻が、かんに触つたと見えて、一々肩にピリツと現われる。会場へ道入つて来る遅刻会員の様子を見ていると、ギョチなく道入つて来る者は、どうやら学生時代はペンクチュアの男だつたらしい。抜き足、差し足、忍び込んで来る身体、こなしのうまいのは学生時代の遅刻の名人芸が未だに板に付いているのだらう。思わず苦笑した。

#### (2) 山村幹事が會長につつかれ

決算予算を作るに幾日もく掛つたので、その説明に熱が入る。数字が多いので聞いている方は、板の間に坐らされているようだし、時間間に制約があるので、會長、空気を察して幹事をつつくと、山村幹事は思わず大声で「早くやります」と言つて熱弁相変らず、たうくたり。

#### (3) 老先輩は「お上り」さん

第一学内に道入ると各部の教室が新增設されて昔の様子は無い位。懇親会で学校から高雄にバスで行くと衣笠村あたりが、すっかり町になつているし、高尾へは、わらじ掛けで行つたものが、驚嬢を乗せてバスで行ける。これから総会に欠かさず出席して若返ろうと老先輩の喜び。

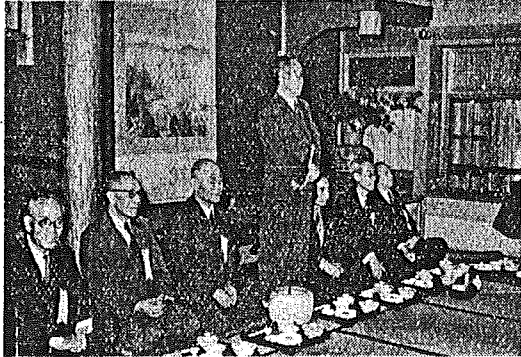
#### (4) わたしは誰でしょう

○私は明治の卒業生です。勿論頭髮

下。榎屋にて會長挨拶



上。バスに分乗清瀧へ



下。榎屋にて會長挨拶

は眞白です。そして冬困る持病があつて歩行は困難です。

○懇親会で高尾の紅葉を賞し清瀧まで、木の根を踏み、岩角を走り、杣道をよおるといふので、皆、私を心配して呉れました。

○元気で清瀧に辿りつきました処が皆驚いて、ペンクチュアテストに耐えたなどと身体についてのみ見ているのです。

○実は私を元気に、この難路を通らせた原因があります。

それは、目的地の榎屋には、私の学生時代に、ボツピンで琵琶の上手な女がいたので、京都から、わらじばきで通つたのです。その当時を思ひ、その時の女がいるのではないかと言う幻影と懐きさが、私を歩かせたのです。

〔註〕明治時代は、そば屋か、うどん屋しかなく。勿論、話でもしようと言う女のおろろ筈がない。ハイカデな処ではミルクホールと云うのがあつた。茲は牛乳と虎巻きの菓子しかない。ミルクホールには、新聞と官報とがある。これを読みに行くのが主目的であつた。ジヨウカマンを言つて話の出来る女は、清瀧位しかなかつた。〔試し時〕を越えるのに、わらじばきが必要だつた。

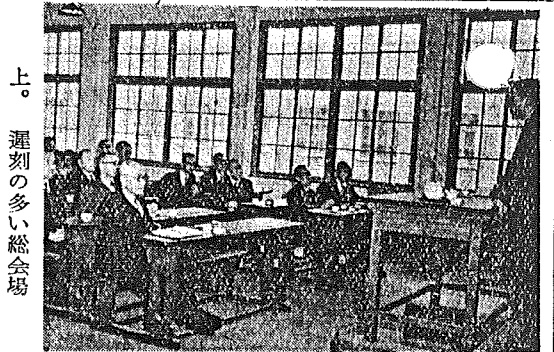
○処が、私のベツピンと言ふのが、まだ生きていて近くで煙草屋をしてゐるといふのです。

○思い切つて会に行つたのですが今様浦島の縮略で、幻滅の悲哀に終つたことは申すまでもありません。

○扱て私は誰でしょう。このクイズの答は編集部まで。

#### (5) 教室の歌を御存知ですか？

懇親会席上のこと。昭和八年組が一同、座布団を蹴つて、すつくと立



上。遅刻の多い総会場



下。あゝシンド、清瀧はまだか

ち上る。皆の物々しさにオヤツと目を見張る。

リーダーの久保君が(多分教室の歌の意だろう)校歌を合唱しますと云う。校歌があるかないか誰も知らない。何時校歌が出来たのだらうと、ひそかに思つていた。やがて「アイン！ツバイ！ドライ！……」月は朧に東山……酒で陶然としていた出席者は、小首を傾げて、何だか聞いたような歌だと、あれこれと考へ廻した。

血の巡りの早い一会員が「それは祇園小唄だ」とさげんだので、会場にドツと笑聲が起り、一杯食わされた目に涙して笑うこと一しきり

多分、昭八組の学生時代に、祇園小唄が盛に唄われたものと想像される。大学時代の彼等の行状記は何と書いてあるだらうか。

#### (6) 羊頭を掲げて狗肉食へ売らず

清瀧から嵐山を経て四条大宮に帰るバスの中。驚嬢が唄つて、マイクを会員に廻す。感にうたつた。誰かが「岡本先生！白頭山節」とマイクを先生に渡した。先生は巷間の白頭山節は正調でない、馴れた講義口調。かつて鳥養先生と二人で朝鮮を旅行した際、本場の白頭山節を仕入れたので、これを京都の祇園に正調を移し、それから日本全国へ拡げる企画をされた由。

この企画を実現されたか、どうかは分らない。

こゝまで長々と解説があつて、さして先生は唄うのかと思つて、皆固唾を呑んで待つたが、実演は次の機会に譲るとのこと。羊頭を掲げて、白頭山を売らずと京童の声。

〔除の声。野郎ばかりちや唄えぬ〕

洛友会々々費領收

昨年九月一日より  
十一月廿一日迄  
到着の分(續)

Table with columns for names and amounts. Includes names like 立川昭三, 森本義一, 松本安弘, etc.

Table with columns for names and amounts. Includes names like 森元覚太郎, 深見源一郎, 内田守, etc.

Table with columns for names and amounts. Includes names like 永田良孝, 萩原重博, 大塚重遠, etc.

Table with columns for names and amounts. Includes names like 伊藤義一, 安達時敏, 木村誠毅, etc.

(編集部より)
△隔月発行という会報なので、会長の年頭挨拶が、一寸気にかかる。やがて会が充実すれば、こんなことはなくなる。一日も早く、その時の来るのを祈る。
△それに関連して、総会こぼれ話の間の抜けた感だ。こぼれ話には中々に面白いものがあつたが、会報に出せないものもあつた。
△寄せ書きは必ず墨で書いて欲しい。それでないと凸版に取れない。ただ名前を列ねるより、クラス会の容子を書いて貰つた方が、読む人に懐かしみがある。
△京都駅の写真を出したが我々には懐しいからである。工事現場の面影にしたのは技術者ばかりの会員だからと老涙心。